

苗字アイデンティティ・カテゴリサイズへの 自己認知と夫婦別姓制度への意識のずれ

○山崎裕也¹・石野陽子²

(¹ 島根大学教育学部学校教育課程 I 類・² 島根大学教育学部)

問題と目的

2016年5月12日現在において、4野党が結婚後も夫婦が別々の姓を名乗れる選択的夫婦別姓制度を導入するための民法改正案を衆院に共同提出していることから分かるように、世の中の動きとして夫婦の別姓を認めるべきであるという意見が高まりつつあり、選択的夫婦別姓制度に関する議論が現代の問題点となっていることが分かる。そこで本研究では、苗字アイデンティティ・カテゴリサイズへの自己認知と夫婦別姓制度との関係性を調べることで、夫婦別姓制度を選択する一つの助けとなることを目的とする。

方法

対象者：島根大学学生 118 名を対象とした。

調査期日：2016年7月8日に実施した。

調査方法：苗字アイデンティティ・カテゴリサイズへの自己認知と夫婦別姓制度への意識に関する質問をするための質問紙を作成して、学生にアンケートを取った。質問項目は、「苗字アイデンティティ」、「カテゴリサイズへの自己認知」、「夫婦別姓制度への意識」の3つの観点から作成した。19の項目群について、「a: まったく当てはまらない、b: どちらかといえば当てはまらない、c: どちらかといえば当てはまる、d: 当てはまる」の4件法で回答を求めた。

結果と考察

学生の回答を最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。|.30|以下の項目を削除し、計18項目での分析となった。「苗字アイデンティティ」、「カテゴリサイズへの自己認知」に関する質問項目は、解釈のしやすさからそれぞれ3因子解と2因子解を採用した。「苗字アイデンティティ」の第1因子は「自分の苗字への好的印象」、第2因子は「自分の苗字への依存」、第3因子は「苗字と自分の関連付け」と命名した。「カテゴリサイズへの自己認知」の第1因子は「他者—自己への苗字の親近感」、第2因子は「自己—自己への苗字の親近感」と命名した。

1: 苗字アイデンティティが高い人、または、カテゴリサイズが小さいと考える人ほど夫婦別姓制度に肯定的であるという仮説を検証した。その結果、苗字アイデンティティの高さと夫婦別姓制度への考えとの関係性は認められなかった ($r=-.33$, $p=.18>.10$)。しかし、カテゴリサイズが小さいと考えることと夫婦別姓制度への考えにはある程度関係 ($r=-.28$, $p=.002<.010$) が認められた。

2: カテゴリサイズへの自己認知が改姓に対しての意識には関係があるという仮説を検証した。その結果、カテゴリサイズへの自己認知の得点と、「自分の苗字を結婚しても変えたくない」という改姓への意識に関する質問項目の相関係数が低かったため ($r=-.003$)、相関は認められなかった。また、カテゴリサイズが大きいと考える人と小さいと考える人で改姓への意識に差があるか t 検定による分析を行った。その結果、これらの数値に有意な差は認められなかった ($p=.41>.10$)。

3: 男性と女性を比較した時、男性の苗字アイデンティティが高いという仮説を検証した。その結果、女性の苗字アイデンティティの方が高いという結果になった (男性は 24.80、女性は 25.37)。また、男女の苗字アイデンティティの数値に差があるか t 検定による分析を行った結果、これらの数値に有意な差は認められなかった ($p=.557>.100$)。

これらの結果から、カテゴリサイズが小さいと考える人ほど夫婦別姓制度に肯定的であるということが分かる。しかし、仮説2の検証により、カテゴリサイズと改姓に対する意識には関係が認められなかった。調査対象が学生だということから、今すぐ改姓するか否かという判断をする上での材料が少ないのかもしれない。

苗字アイデンティティは女性のほうが高いという結果が出たが、「自分の名字を結婚しても変えたくない」という質問項目を男女で比較すると、男性のほうが変えたくないという反対の結果になった (男: 2.20、女: 1.69)。これは、昔の家父長制度の名残からなるのかもしれない。